

D. デネットによる変化盲実験の論証の批判的検討⁰

石渡 満理奈

凡例

・引用は「」と太字に注が付けられたもの、あるいは、改行と太字に引用が付けられたものである。

第 1 節 はじめに

私の関心は人間と機能的には同一だが、生物を構成するものではない素材からできているヒューマノイドと人間を比較したときに、両者には重要な違いがあるのではないかというものである。機械と人間を比較するにあたって、前者をこのようなヒューマノイドに限定することの動機はふたつある。ひとつは、単なる機械ではなくヒューマノイドと限定した動機である。それは、私たちが機械にクオリアがあるかないかを判断するときには自分たち人間と外見が似ているということが重要なポイントになると思われるからである。単なる機械と人間の姿を模したヒューマノイドが悲しみを表現したとき、私たちはそれらの外見が人間に似ているかどうかでそれらが本当に悲しんでいるのか否かの判断を変化させるように思われる。しかし、本論ではクオリアに焦点を当てた議論を展開したいと考えている。そのため、そのように判断にぶれを生じさせるような点は議論の対象から外したいと考えている。もうひとつの動機は、ヒューマノイドを生物から構成するものではない素材からできていると限定した動機である。それはスワンプマンのようなものを考慮の対象外とするためである。というのも、生物を構成する素材によって構成されるスワンプマン¹はあきらかにクオリアを有しているように思われるからだ。もし、ヒューマノイドの素材がスワンプマンと同じように生物を構成する素材から構成されていた場合、それはほとんどスワンプマンと同じものであると考えられる。本論では人間といわゆる機械（ヒューマノイド）を比較したい。そのためには、人間とほとんど

同じスワンプマンを議論の考慮の対象からは除外しなければならない²。私たちは、人間とヒューマノイドの重要な違いとして直観的にクオリアの有無を想定したくなる。しかし、このような想定に対して、クオリアはそもそも存在しないという原理的な挑戦がある。本論は、クオリアを存在しないものであると論じるダニエル・デネットからクオリアの実在性を守ることが主要な目的である。

心の哲学においてクオリアは因果的には説明できない性質をもつ心的状態として登場した。クオリアは「主観性(subjectivity)」「内在性(intrinsicality)」「内観性(introspectiveness)」の3つの性質を有すると伝統的に考えられている。クオリアの消去主義者であるデネットはこの3つの性質すべてを同時に備えるようなクオリアは存在しないと考えている。本論では、デネットがクオリアの有する性質のひとつである主観性を否定するために用いた「変化盲」論証 (change blindness argument) を取り上げる。そしてデネットのこの論証が失敗していることを示すことで、デネットの変化盲論証ではクオリアの主観性を否定することはできないと主張する。

本論でクオリアの消去主義者を取り上げる理由は、クオリアに関する反還元主義、還元主義、消去主義という立場のうち消去主義だけがクオリアの存在を否定するからである。クオリアの実在論者である還元主義者や反還元主義者にとってクオリアの存在を消去されることは議論の対象となるものを消去されることになる。したがって、本論でクオリアが議論に値する対象であることを示唆することは副次的な目的でもある。

また、クオリアの消去主義者のなかでもデネットを取り上げるのは、デネットに対してはクオリアの実在論者（ここでは主に還元主義者と反還元主義者）から有効な批判が与えられてないからである。クオリアの消去主義者として著名なポール・チャーチランドにはクオリアの実在論者から批判が与えられている³。しかし、デネットに対する有効な批判は寡聞にして聞いたことがない。そこで、本論ではクオリアの実在論の立場からデネットへの批判を試みる。

デネットの論証の中でも変化盲論証を取り上げるのは、変化盲論証がデネットのクオリア消去の主要な論証だからである。デネットのクオリア消去の試みからクオリアの実在性を擁護するには、デネットがクオリア消去の主要な論拠

にしている変化盲論証に批判を与えることが最も有効である。したがって本論ではデネットの変化盲論証に焦点を当てる。

以下、本論の構成を示す。第2節では本論で使用される語句の定義をする。第3節ではデネットの変化盲論証の目的と概略を示す。第4節第1項では、デネットの変化盲論証の欠陥を指摘する。第2項では、第1項の欠陥の原因が主観性と十全性の混同であるということを示す。第3項では、デネットが主観性と十全性だけでなく主観性と不可謬性も混同していることを示すことで、本人の権威という語の多義性を指摘する。なお、本論第3節第2項では、主観性の代わりに十全性が否定されるが、本論の目的は主観性を守ることであるため、十全性が否定されることは問題ないとする⁴。

第2節 語句の定義

本論に入る前に、「クオリア」「主観性」「内観性」「内在性」という言葉について説明しておく。なお、内在性については本論のテーマに関して言えばあまり重要ではないためごく簡単な説明にとどめたい。

伝統的理解では、クオリアとはなんらかの感覚そのもの、あるいはなんらかの感じそれ自体のことである⁵。つまりこれは主観的なもので、心的状態の内在的な性質であり、内観的に知られるものとされている⁶。

また本論では主観性とは「私だけが自分のクオリアにアクセスすることができる」という意味で理解する⁷。これは、「他の人より自分が自分のクオリアについてよく知っている」という意味を含む。このことから「私」は他の人よりも自分自身のクオリアの認知について優位性があると言える。他人よりも「私」に優位性があることから、主観性は「一人称アクセス可能性(first person accessibility)」や「一人称権威(first person authority)」「本人の権威」という言葉と置き換えられるものであると言える。

あるものが内観的であるとは、内観的知識の対象となるものであるということである。内観的知識とは、自分自身の心的状態について無媒介⁸で直接的に得られる知識のことを指している⁹。この内観的知識はの中にさらに「不可謬性 (incorrigibility)」と「十全性」という特徴を持っている。不可謬性とは、

自分自身の心的状態についての知識が推論を介さずに得られることから、誤りの余地がないということを使う¹⁰。また十全性とは、自分自身に知ることのできていない部分が存在しないという意味である¹¹。つまり内観によって得られた知識は、知覚によって得られた知識とは反対に¹²、内観を通して得られるだけで十全な知識となる。

ここまで簡単に本論の目的と本論で扱う語句の確認をしてきた。次節からはデネットの変化盲論証の内容を確認し、批判を行っていく。

第3節 「変化盲」論証の目的と概要¹³

デネットの実施した変化盲実験とそれに基づく論証の目的は、クオリアが主観性を有するという伝統的見解は妥当ではないと示すことにある。

では、ここで言われる変化盲実験とはどのような実験なのか。以下に、デネットの著書『スウィート・ドリームズ』の中で解説されている実験の手順と論証を、簡単にまとめた。ここでは、変化盲実験とそれに伴う論証を「変化盲」論証と呼ぶことにする。変化盲論証は変化盲実験とそれに基づく論証というふたつのパートから成る。さらに変化盲実験は、おおまかに、実験者による質問と被験者による回答、その回答を A, B, C に分類するという手順で構成されている。本論では変化盲実験における A の回答についてのみ注目し、デネットの議論に批判を行う。残りの B と C の回答についての議論は、本論が行うデネットに対する批判に関係しないため、ここではごく簡単に紹介するにとどめる。本論の批判を理解するにおいては、さしあたり問題がないということを了承されたい。

変化盲実験とは、デネットが行っている哲学者向けの講演で、レンシンク、オリガン、クラークが作成したビデオを見せて行なった実験のことである。その実験で、被験者である哲学者は2枚のほとんど同じだが、一部分だけが決定的に異なった写真¹⁴を250ミリ秒ごとに交互に見せられる。そして、被験者はその2枚の写真の違いに気がついた時点で手元のスイッチを押すように指示されている。多くの被験者は2枚の写真の違いに気がつくまでに20-30秒の時間を要し、しかも、その違いは一度その違いに気がついたあとは、なぜそのよ

うな違いに気がつかなかったのか自分自身を疑いたくなると驚くほどであるという。デネットは被験者にこのような経験をしてもらったあと、被験者自身の光の受容体や変換器の出力が250ミリ秒ごとに変化していたという脳神経科学的な事実を伝えた上で、被験者に対して、「2枚の写真の違いに気がつく前の段階で自分自身のクオリアは変化していたのかどうか」と問いかける¹⁵。そして、デネットは、「クオリア実在論者が言うように、クオリアの必要条件が主観性、つまり、クオリアを有している本人だけが特権的に接近可能であるという性質なのであれば、被験者は自分自身のクオリアの変化について、誰よりもわかっている、あるいは、わかりうるはずであるが、あなたはどのように考えるのか」と問うのである。このようなデネットの問いかけに対して、哲学者の反応は大きく3パターンに分類されるとデネットは述べる。

A はい、私のクオリアは変化していました。

B いいえ、私のクオリアは変化していませんでした。

C よくわかりません。なぜならば、

(1) 自分が「クオリア」ということで意味していたことを、私自身ずっとしっかりと理解していなかったことを今悟ったからです

(2) たしかに、自分が「クオリア」ということで何を意味していたかを、私はしっかりとわかっていますが、この場合、私自身のクオリアを一人称的にはアクセスしていません、それに、

(a) 三人称的科学はクオリアにはアクセスできません!¹⁶

デネットは、被験者のこれらの反応に対して、それぞれどのように欠陥があるのかを指摘していく。まず、デネットはAの回答をした場合、その人は自分の知らないところでクオリアが生じているという可能性を認めなければならないことになり、それはクオリアに対する三人称的接近の権威を強める危険性があると主張する。そして、彼はそのことが、クオリアの主観性すなわち「私だけがアクセス可能である」という性質や不可謬性を否定することにつながると述べる。したがって、もしもクオリアの主観性を守りたいのであれば、被験者はAの回答を避けなければならない。

D. デネットによる変化盲実験の論証への批判的検討

そこで、デネットは B の回答について検討をはじめ。B の回答の利点は、自分が気がつくまでクオリアが変化しなかったと回答することで、クオリアの一般的特徴である主観性を守ることができる、ということだとデネットは分析する。しかしデネットはこの B の回答をとる場合、クオリアの一般的な特徴のもうひとつの重大な要素である、「クオリアは経験の内在的性質である」という特徴を放棄しなければならないことになると言う。なぜならクオリアの生起にクオリアを有する本人の判断や気づきが必要となり、クオリアがそのようなものから論理的に構成されることになってしまうからだ。

次に、C の回答についてのデネットの考察に移る。C の回答には 3 つのパターンが存在していた。大きく分けると、自分のクオリア理解が不十分であったと認める立場 C-(1)と、そうでない立場 C-(2)と C-(2)-(a)だ。デネットはその選択肢(1)を選んだ人々について特に言及しない。一方で、(2)を選択した人に対しては、デネット自身が採用しているヘテロ現象学の方法論を提案する。ヘテロ現象学とは、三人称的な科学的アプローチによって対象を分析する方法論のことを指す。ここでデネットが(2)の人々にヘテロ現象学をお勧めするのは、(2)を選んだ人々は自分自身の判断や気づきに頼ることなくクオリアが生じたり変化したりすることになんの問題も感じていないということになり、主観性がクオリアの一般的な特徴として決定的なものではないと認めていることになると思われるからだ。クオリアの一般的な特徴として主観性が本質的ではないということが決定されれば、変化盲実験のような場面で、自分自身がクオリアの変化に気がついていない場合、そのクオリアがどのように変化していたのか、という疑問に三人称的な探究によって答えることができるようになる。これがデネットがヘテロ現象学を勧める理由である。

とはいえこのヘテロ現象学はクオリアに対する三人称的接近を許す方法論である。そうした方法論であるため、哲学者の中には、クオリアをヘテロ現象学の探究の対象から除外したいと考える者もいる。そのような人々は、(2)-(a)の選択肢に進み、変化盲実験の場合に限り、自分自身がクオリアに接近できないことを認め、さらに三人称的科学的クオリアに接近できないという主張をする。しかし、この選択をした場合、クオリアが三人称的な科学的な探究の対象ではないということを示すだけでなく、一人称的にも科学的な探究が不可能なもの

であるということを確認することになってしまい、クオリアの立場が全くもって確定できないものになってしまうということをデネットは指摘している。

もちろん、クオリアをヘテロ現象学という三人称的な探究の対象から除外する方法は他にもある。Cの選択肢に進まず、Bの選択肢にとどまるという方法である。だが、この方法はクオリアをヘテロ現象学から守るということを保証するだけで、クオリアが自分の判断や気づきによって論理的に作られてしまうという問題を孕むために、棄却されなければならないとデネットは考える。すると、ヘテロ現象学からクオリアを守りたい人の取れる選択肢はAのみとなるが、そのAでさえも、上記の理由で避けられるべき選択肢となっている。

デネットのクオリアに関する変化盲実験の考察は、クオリアの主観性を守ろうとする限り、このように「循環」¹⁷し続けることを示している。ここでいう循環とは以下のようなものである。被験者がクオリアの実在論者かつ反還元主義者であった場合、最も自分の立場に近い回答はAの回答になる。Aが批判されたとき、被験者は反還元主義をあきらめて実在論を守ろうとし、Bの回答へ進む。しかし、Bの回答も批判されてしまうと、Cの回答に移らざるを得ない。Cの回答はクオリアの実在性すら危うくするため、被験者はAの回答に戻りたくなる。しかし、Aの回答はすでに批判されている。デネットは「循環」という言葉をこのような意味で使用していると読み取れる。

しかし変化盲実験についての考察は、本当にデネットの言うように循環しているのだろうか。クオリアに関する主観性を保守しつつ、この循環を止めることはできないのだろうか。次節においてAの回答に対するデネットの議論をこの観点から検討する。

第4節 「変化盲」論証の検討

本節の目的はデネットの「変化盲」論証の欠陥を指摘することとその欠陥の原因を探ることである。第1項はデネットが主観性の否定を試みて誤って十全性を否定していることを指摘する。続く第2項では、第1項で指摘された論証の欠陥がなぜ生じたのかについて主観性と十全性の混同という点に注目して考察する。第3項では、デネットの論証の不可解な点についてデネットの応答を

想定し、それに対して再反論を試みる。

第1項 論証それ自体の検討

デネットは、前節で確認したとおり、A を選択した人に対して、A の選択をすることは、三人称の権威を強めることであり、それにより本人の権威と不可謬性が失われるという批判をする。しかし、デネットのこの批判は本当に A の選択をした人に対して有効な批判なのだろうか。そのことを確認するために、以下にデネットが A の選択をした人々を批判している箇所を引用する。

「はい」と答えたくない場合には、自分のクオリアにおける迅速かつ膨大な変化が自分の知らないところで生起することを承認することを強いられる。(中略) それを認めることは、クオリアについては本人に権威があり、不可謬ですらあり得るという標準的な想定を覆すことになる。というのも、他人、すなわち、三人称の人とか火星人ですら、その当人のクオリアの不変性ないし可変性について、当人よりも強い権威を持つことになるかもしれないからである。¹⁸

デネットは変化盲の体験をした哲学者たちに、実験写真の変化に気が付く前から自分たちのクオリアが変化していたのか否かについて問いかけた上で、A の選択をした人々に対して以上のような議論を展開する。この議論をデネットの記述に沿ってもう少し詳細に確認してみると、以下のようになる。

まとめ 1

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">(1) 「実験写真の変化に気が付く前からクオリアは変化していたのか」という質問に「はい」と答えるならば、自分のクオリアが自分の知らないところで生起することを認めることになる。(2) 自分のクオリアが自分の知らないところで生起することを承認するならば、三人称の権威が強まる。(3) 三人称の権威が強まるということは、すなわち、クオリアは本人の権 |
|---|

威があるという想定を覆す、かつ、クオリアは不可謬性をもつという想定を覆すということである。

ゆえに

- (4) 「実験写真の変化に気が付く前からクオリアは変化していたのか」という質問に「はい」と答えるならば、クオリアには本人の権威があるという想定を覆す、かつ、クオリアは不可謬性をもつという想定を覆す。

この整理における各要素はそれぞれ有効なのだろうか。(1)は、「気が付く前からクオリアが変化していた」という命題を「自分の知らないところでクオリアが生起していた」という命題に置き換えただけなので、不自然なところは何もない。問題は(2)である。(2)は「自分の知らないところでクオリアが生起した」ことを認めることから、クオリアに対する三人称的な権威が強まることを示している。しかし、三人称的な権威を「自分以外の人も自分のクオリアについて知ることができる」という意味で捉えたとき、これが強まることを示すためには、そもそも、「自分のクオリアは自分だけが知ることができる」という性質を否定しなければならないように思われる。しかし、「自分の知らないところでクオリアが生起する」ということを認めるだけでは、「自分のクオリアは自分だけが知ることができる」という主観性そのものは否定できない。なぜなら、「自分の知らないところでクオリアが生起する」ことの承認は「クオリアには自分の知らない部分がある」¹⁹ ということの承認でしかないからである。このことは「自分のクオリアは自分だけが知ることができる」という主観性の否定ではなく、内観的であるという性質のうちの、十全性の否定に過ぎない。デネットの議論の(2)は、十全性の否定から三人称的権威の強化を導いているという点で妥当な推論ではないと言っていいだろう。(2)が有効でないとすれば、この論証の(3)を構成する三人称の権威の強化がデネットの議論からは導き出せていないことになる。三人称の権威の強化が導き出せないということは、すなわち、(3)で言われる「本人の権威があるという想定を覆す」ということにもならない。したがって、(4)のように、「変化に気が付く前からクオリアは変化していたのか」という質問に「はい」と答えるということから、クオリアは本

人の権威があるという想定を覆すということは結論付けることはできない。

第2項 「本人の権威」という語についての想定

前項では、十全性の否定から主観性の否定を導出しようとしてしまっているというデネットの議論の問題点を確認した。その問題の原因として「本人の権威」という語の多義性があげられる。本項では「本人の権威」という語の多義性からデネットの論証を批判する。

デネットは先に引用した箇所で「本人の権威」が覆されると表現しているが、ここでいう「本人の権威」には3つの解釈が可能であるように思われる。この3つの解釈はクオリアの持つ性質から導き出せる。それは以下の3つである。

- (A) 本人だけが自分のクオリアに接近可能である（主観性）
- (B) 本人ならば自分のすべてのクオリアに接近可能である（十全性）
- (C) 本人ならば自分のどんなクオリアについて間違えることはない（不可謬性）

第1節で確認したとおり、クオリアの伝統的な特徴として「本人の権威」と言うとき、それは(A)の意味で用いられる。すると、デネットの目的が最終的に「本人の権威」、つまり、「主観性」というクオリアの伝統的な特徴を否定することにあるのだとしたら、デネットは(A)の意味での「本人の権威」を否定しなければならない。しかし、デネットの議論は、実際には(B)の意味での「本人の権威」あるいは、(C)の意味での「本人の権威」のどちらか一方またはどちらもを否定しているように思われる。なぜ、そのように思われるのかを考察するために以下の疑問について考える。

デネットは「私だけがその経験にアクセスすることができる²⁰」というスティーヴン・パーマーのクオリアに関する伝統的な見解を確認したのち、「しかし、この当たり前に聞こえる主張は、私自身の経験の内在的性質にアクセスすることが私ですらできないという、一見無茶な仮説から守ってやらなければならない²¹」（傍点は原著者による）と続けている。この「私ですらできない」という

ことは何を意味しているのだろうか。上述の3種類の「本人の権威」をそれぞれ否定するとどうなるのかについて検討したい。

まとめ2

A: 本人の権威（＝本人だけが接近可能）を否定する。

1. 「本人の場合だけが自分のクオリアに接近可能である」という命題は「自分のクオリアに接近可能なのは本人の場合だけである」という命題と置き換えられる。
2. 「自分のクオリアに接近可能なのは本人の場合だけである」という命題は、「クオリアに接近可能なのはすべて本人の場合だけである」という命題に置き換えられる。
3. 「自分のクオリアに接近可能なのはすべて本人の場合である」という命題を否定すると、「[自分のクオリアに接近可能なのはすべて本人の場合である]ということはない」という命題になる。（第三者が接近できる可能性が出てくる）

B: 本人の権威（＝本人ならば接近可能）を否定する。

1. 「本人ならば接近可能である」という命題は「[本人である、かつ、接近可能ではない]ということはない」という命題に置き換えられる。
2. 「[本人である、かつ、接近可能ではない]ということはない」という命題を否定すると、「[本人である、かつ、接近可能ではない]」という命題になる。

C: 本人の権威（＝本人ならば間違えない）を否定する。

1. 「本人ならば間違えない」という命題は「[本人である、かつ、間違える]ことはない」という命題に置き換えられる。
2. 「[本人である、かつ、間違える]ことはない」という命題を否定すると、「[本人である、かつ、間違える]」という命題になる。

以上のうち、A-3 は、「[自分のクオリアに接近可能なのはすべて本人の場合で

ある]ということはない」、つまり、「本人以外も本人のクオリアに対して接近することが可能」である状態、三人称の人にも権威があることを意味している。したがって、Aの意味で「本人の権威」という言葉を捉え、否定した場合、三人称的な権威があるという結論が導き出されなければならない。

では、Bの場合はどうだろうか。B-2は、「本人であり、かつ、接近不可能」、つまり、単に「本人なのにクオリアに対して接近不可能」である状態を表しており、ここには、本人以外なら接近可能であるという意味は含まれない。まして、本人以外の権威が本人の権威を上回るということの意味されない。

Cの場合は2が「[本人である、かつ、間違える]」であり、「本人なのに自分のクオリアに関して間違えることがある」という状態を表している。ここでも、本人以外ならクオリアに接近可能であるという意味は含まれない。

さて、ここまでで、ここで、「本人の権威」の否定をするとどのような意味になるのかについて分析したが、デネットが示していた「私ですら（クオリアに接近）できない」はAからCのどの否定の結果のことを指しているのだろうか。それはBであろう。というのも、「私ですら接近できない」という表現は「まして、第三者ならなおさらできない」ということを含意しており、本来デネットが導き出したはずの、三人称的な権威の強化が全くないことになるからだ。しかし、もしもこの分析が正しく、デネットがBの意味での「本人の権威」を否定しようとしていたのだとしたら、問題が生じる。それは、クオリアの伝統的な特徴である主観性、すなわち、「本人だけが自分のクオリアに接近可能である」という性質を否定するためには、Aを否定する必要があるということである。ここに「本人の権威」という語をめぐる、デネットの混乱がうかがえる。

この「本人の権威」という語の意味がAとBの両方の意味で曖昧に使用されているという点は、先に確認した十全性の否定から主観性の否定を導出してしまっているという点と重なり合うということを指摘できる。というのも、今確認した「本人の権威」のAの意味は、デネットが本来否定したい、あるいは否定すべき意味であり、それが主観性と同一のものであるからだ。加えて、Bの意味での「本人の権威」の否定は、「本人なのにクオリアに接近不可能なことがある」状態を示しており、これは、「本人なのに自分のクオリアについて知らないことがありうる」という十全性の否定と同じことを述べていると考えてよい。

このように捉えると、第3節第1項で示したような十全性の否定から主観性の否定が導かれてしまっている論証は「本人の権威」という語がデネットの中でAとBのふたつの意味で混同して使用されているということに起因していると考えられる。

第3項 「不可謬性」についての検討

ここで一応検討しておきたい要素がある。デネットはまとめ1の(3)の部分で示したように、三人称の権威の強化から本人の権威の否定と不可謬性の否定を導いている。ここで不可解となるのが、これまで一度も登場していなかった不可謬性という語が論証の途中で突然現れるという点である。これまで確認してきたデネットの議論の中で、不可謬性だけが突然現れ、他の部分でも特に言及されることがなく、宙に浮いた存在であった。このことをどのように理解すればよいのか。

デネットからの想定しうる応答のひとつは、デネットの用いる不可謬性という語が、本論における十全性のことを指しているという応答である。たしかにこのように理解することで、まとめ1で、宙に浮いていた不可謬性がどうか説明できるものになると思われる。というのも、もし、デネットの言うように「本人の権威」という語をBの意味とCの意味を区別することなく同一のものとして使用していたのであれば、主観性を否定しようとする論証の中で、同時に不可謬性が否定されてしまってもおかしくないと思われるからだ。

しかし、その応答は、おかしくないように思われるその一方で、依然として不可解な点は残る。それは、まとめ1の(1)がそもそも十全性の否定を認めるというところから始まるという点である。もしも、不可謬性を十全性と置き換えて読むとしたら、デネットの論証の(4)は「変化に気が付く前からクオリアは変化していたのか」という質問に「はい」と答える(十全性の否定)ということから、クオリアは本人の権威があるという想定を覆す(主観性の否定)ということと、クオリアは不可謬性(=十全性)をもつという想定を覆す(十全性の否定)ということを導くということになる。だが、十全性の否定から十全性の否定を導くというのは明らかに情報量のない推論である。これは単に「P

ならばP」というトートロジーになるからだ。

もうひとつ想定されうる応答は、デネットの使用する不可謬性という語が主観性の意味を指しているという応答である。このように考えると、まとめ1の(3)は、本人の権威と不可謬性のふたつを否定しているのではなく、本人の権威(=主観性)すなわち不可謬性(=主観性)という同一のものを否定しているのだと捉えなおすことができる。主観性と不可謬性が同一のものであると考えれば、まとめ1の(3)で突然、不可謬性という語が出てきても問題がないように思われる。

しかし、主観性(=「本人だけが自分のクオリアを知ることができる」と不可謬性(=「自分のクオリアについて間違えることはない」)を自覚的に同一のものであるとデネットはみなすだろうか。まとめ2で確認したように、Aの否定とCの否定は全く違う意味になる。この明白な違いを自覚しながら主観性と不可謬性を同一のものであるとみなすには無理があるように思われる。

そこで考えられるのが、デネットが主観性と不可謬性の区別を自覚せずにどちらも同様に本人の権威という語の意味の中に含まれるものとして扱っているという解釈である。このように捉えると、まとめ1の(3)は、デネットが本人の権威の中に不可謬性が含まれると考えていたために、本人の権威の言い換えとして突然、不可謬性という語が出てきたと考えられる。

以上のように、デネットは本人の権威という語の中に主観性の意味だけでなく十全性の意味も不可謬性の意味も込めてしまっている。この本人の権威という語の多義性が第4節第1項で指摘したような十全性から主観性の否定を導くという誤った論証を引き起こしている。第3節で確認したように、デネットの変化盲論証はAの選択肢が否定されたらBの選択肢を、Bの選択肢を否定されたらCの選択肢を、Cの選択肢を否定されたらAの選択肢をというように循環していた。しかし、実際にはデネットの変化盲論証は選択肢Aを否定することができていない。すなわち、デネットの変化盲実験による「本人の権威」、つまり、「自分だけが自分のクオリアを知ることができる」という主観性を否定するための論証の循環を止めることができると考えてよいだろう。したがって、デネットの変化盲実験の結果に基づいた循環的論証はAの回答を不適切な仕方であらう論じた段階で失敗に終わっているのである。

第5節 質疑応答を受けて²²

最後に、本節では本論の以上のような議論に対して想定されうる批判について考察する。ここで想定されうる批判とは以下のものである。

「たしかに、論理的に考えればデネットの変化盲論証はクオリアの有する性質のひとつである主観性を否定することに失敗しているようにみえる。しかし、変化盲の実験ビデオを見せられたあと『あなたの脳は実験写真の変化に合わせて変化していたが、あなたのクオリアは変化していましたか』という質問に『はい』と答える人は、その段階で自分以外の人が自分のクオリアについて知ることができているという事実を認めてしまっているのではないだろうか。なぜなら、この質問に『はい』と答えるということは、自分のクオリアが変化していたかどうかということの判断を脳の変化という第三者の視点からの観察によって得ていたと認めているということになるからだ。もしそうだとしたら、この被験者は、自分だけが自分のクオリアについて知ることができるという意味での主観性をクオリアが有していないということを認めていることになるだろう」

私はこの批判に対してふたつの観点から答えたい。ひとつは、被験者がいつ「クオリアが変化していた」という判断をしたのかという観点から、もうひとつは、「クオリアについて知る」ということはどのようなことかという観点からである。

まずはひとつめについて考える。この批判は『あなたの脳は画像の変化に合わせて変化していたが、あなたのクオリアは変化していましたか』という質問に『はい』と答える人は、その段階で自分以外の人が自分のクオリアについて知ることができているという事実を認めてしまっているのではないだろうか」と問うている。ここでのポイントはデネット(=実験者)による被験者への「あなたのクオリアは変化していましたか」という問いかけが、クオリアの変化盲の実験ビデオを見せ、被験者が写真の変化に気が付き、脳が変化しているとい

う事実を教えられたあとに発せられているという点である。脳の変化の画像を見せられた被験者は、一見すると、自分のクオリアの変化について他者からのヒント（脳の画像の変化）によって気が付いたことになる。だとすると、クオリアの変化が他者にも観察できるということが理由で、クオリアには主観性がないと言えるかもしれない。しかし、実際には実験者であるデネットによる脳変化の画像の提示は被験者が実験写真の変化に気が付いたあとに行われている。被験者は自分で自分のクオリアの変化があったことに気が付いて、それを理由に「はい、私のクオリアは（脳の画像の変化を教えられる前から）変化していました」と答えていた可能性が排除できない。そうだとすると、クオリアの変化が他者にも観察できるということが理由で、クオリアには主観性がないとは言えなくなる。したがって、たとえ脳変化の画像を見なかったとしても、被験者はクオリアの変化について自力で気づくことができたかもしれない。このように考えると、デネットが脳画像の変化を被験者に提示するという手順は、被験者が脳画像を見たからクオリアが変化していたと考えたのか、脳画像とは関係なく自分でそう考えたのか、ふたつの解釈を許してしまっている。

また、ふたつめの観点は以上のひとつめの論点をより強化するだろう。というのも、たとえクオリアの変化が他者にも観察できるということが理由で、クオリアには主観性がないと言えたとしても、クオリアの変化があったことを観察できるということと、クオリアの変化がどのようなものであったのかを観察できるということは別の問題だからである。そして、クオリアの主観性、つまり、自分のクオリアは自分自身にしか知ることができないという本人の権威は、この、どのようなという点が重要なのである。たとえば、私たちはコウモリが超音波によって世界を把握しているということを科学的な方法で知ることができる。しかし、私たちはコウモリが超音波によって世界をどのように把握しているのかということまでは知ることができない²³。この「どのように」という部分が三人称的に観察されることを示していないという点で、デネットの変化盲論証はクオリアの主観性を否定しきれていないと言える。

第6節 おわりに

本論では、デネットは変化盲論証において十全性の否定から主観性の否定を導出してしまっているということを論じた。デネットが主観性と十全性を取り違えたことの原因は、デネットが本人の権威という語に主観性と十全性、不可謬性の3つの意味を込めてしまっていたことである。このことからわかるのは、デネットは変化盲論証を通じて十全性の否定に関しては成功しているという点である。しかし、第1節で確認したようにクオリアにとって最も重要な性質は主観性である。したがって、本論では十全性が否定されることはクオリアにとって大きな問題ではないと考える。

また、たとえデネットの変化盲実験で三人称視点からのクオリアの変化の観察ができていたとしても、その観察はクオリアの生起の有無に関してのみであり、そのクオリアがどのようなクオリアなのかについてまでは観察できていないという点でデネットの論証は成功していないと言える。

ところで、本論の目的はデネットの変化盲論証を批判することでクオリアが議論に値する対象であることを示唆し、クオリアの実在性を守ることであった。本論では、クオリアの必要条件である主観性を批判しようとするデネットの変化盲論証を批判してきた。したがって、本論によってクオリアが議論に値する対象であることを示唆できたと言ってよいだろう。しかし、クオリアの実在性を積極的に論証することは本論では至らなかった。クオリアの実在性を肯定する議論は、別の機会に委ねたい。

註

- ⁰ 本稿は2017年7月16日の哲学若手研究者フォーラムで発表した「『クオリアは主観性を有するか』の批判・検討」を発表後の質疑応答を受けて改訂したものである。
- ¹ [前田, 1999, p. 67] では、スワンプマンを次のように説明される。「あなたが帰宅の途中沼の近くに差ししかかったとき、」稲妻があなたを襲い、あなたの体は分子レベルまで粉々に破壊されると同時に、別の稲妻が沼に沈んだ大木に命中し、舞い上がった無数の粒子が結合しあってあなたの物理的に完全なレプリカが誕生する。」ここで前田の説明するスワンプマンはスワンプマンの一般的な概説であるが、そこではスワンプマンが稲妻に打たれた人と物理的に完全なレプリカであると述べられている。この物理的に完全なレプリカというのが、本論での「生物を構成する素材でできている」ということである。というのも、稲妻で打たれる前の人と物理的に完全なレプリカであるなら、それは生物を構成する素材で構成されているからである。
- ² ここでは、生物とはなにかという議論やあらゆる動物がクオリアを持つのかについて

の議論には立ち入らない。

3. [美濃, 1999]
4. クオリアの必要条件は主観性だと私は考えている。十全性は必要条件ではないと考えているため否定されてもよいと考えている。
5. [柏端, 2008, p. 173] でクオリアの伝統的な説明のされ方が登場する。
6. デネットがクオリアの伝統的なクオリアの性質としてこの3つを想定していることは [デネット, 2009, pp. 111–112] から読み取れる。同様の想定をしている者に [柏端, 2008, pp. 174–175] [信原, 2002] などがあげられる。
7. [デネット, 2009, p. 115] デネットと同様の主観性理解をしている者に [伊藤, 2008, pp. 105–106] [篠原, 2008, p. 199] があげられる。
8. 無媒介とは知覚的媒介や因果的媒介がないということを考えている。
9. [ドレツキ, 2007, pp. 48, 54] [柏端, 2008, pp. 174–175] [信原, 2002, pp. 77–79] がこのような理解をしている。
10. [信原, 2002, p. 82]
11. [信原, 2002, p. 89]
12. 十全に得られるとされるクオリアとは反対に知覚的知識は十全に得られないと私は考えている。
13. [デネット, 2007]
14. 最終ページの付録の写真を参照。
15. 実際のデネットの質問は以下のとおりである。「さて、扉が色を変えていることに気づく前の段階で、写真のその部分に対するあなたの方の色のクオリアは変化していたでしょうか。その扉の部分からくる光を受容する領域にあるあなたの方の網膜の円錐体が、四分の一秒ごとに違う反応をしていたことを私たちはわかっています。また、変換器の出力におけるこのような四分の一秒ごとの違いが、さらに先の大脳皮質における色知覚の経路においても違いを生み出していたということについても確信はもてるでしょうか。では、あなたのクオリアは、スクリーン上での色の変化に合わせて、白・褐色・白・褐色と行ったり来たりしていたのでしょうか。」 [デネット, 2007, p. 118]
16. [デネット, 2007, pp. 120–121] この引用のCはわかりにくいですが、C-(1), C-(2), C-(2)かつ(a)という3つに分岐している。
17. ここでの「循環」という語は、実際にはトリレンマという意味で捉えるのが正しいように思われる。しかし、本論ではデネットの用いた表現に従って「循環」という語を採用する。
18. [デネット, 2007, p. 121]
19. より厳密に表現するなら、「ある時点で自分が持っているクオリアの総体には、自分でも知らない部分がある」となる。
20. [Palmer, 1999, p. 938] 訳は『スウィート・ドリームズ』土屋俊・土屋希和子による。
21. [デネット, 2009, p. 115]
22. 本節は2017年7月16日の哲学若手研究者フォーラム発表内で頂いた質問に答えるものである。
23. [ネーゲル, 1989]

参考文献

日本語文献

- ・井頭昌彦, 2011 「スーパーヴィーニエンス・テーゼと存在論的コミットメント」『科学哲学』 pp. 59-73
- ・岡田岳人, 2012 『心身問題物語——デカルトから認知科学まで——』北大路書房
- ・金杉武司, 2007 『心の哲学入門』 勁草書房
- ・ギルバート・ライル, 1987 『心概念』 坂本百大・井上裕子・服部裕幸訳, みすず書房
- ・ダニエル・C・デネット, 1997 『解明される意識』 山口泰司訳, 青土社
- ・ダニエル・C・デネット, 2009 『スウィート・ドリームズ』 土屋俊・土屋希和子訳, NTT 出版
- ・デイヴィッド・J・チャーマーズ, 2001 『意識する心』 林一訳, 白揚社
- ・デイヴィッド・J・チャーマーズ, 2016 『意識の諸相 上』 太田紘史 他, 春秋社
- ・デイヴィッド・J・チャーマーズ, 2016 『意識の諸相 下』 太田紘史 他, 春秋社
- ・ティム・クレイン, 2010 『心の哲学 心を形づくるもの』 植原亮訳, 勁草書房
- ・トマス・ネーゲル, 1989 『コウモリであるとはどのようなことか』 永井均訳, 勁草書房
- ・長滝祥司・柴田正良・美濃正編, 2008 『感情とクオリアの謎』 昭和堂
- 伊藤春樹「クオリアは自律的に存在するか」5章, pp. 103-128
柏端達也「痛みの志向性とその現象的側面についてすこし」8章, pp. 173-197
篠原成彦「クオリアとクオリア実感」9章, pp. 198-217
- ・野家啓一, 2015 『科学哲学への招待』 筑摩書房
- ・信原幸弘編, 2004 『シリーズ心の哲学 I 人間篇』 勁草書房
- ・信原幸弘, 2002 『意識の哲学』 岩波書店
- ・信原幸弘, 1999 『心の現代哲学』 勁草書房
- ・古田徹也, 2013 『それは私がしたことなのか 行為の哲学入門』 新曜社
- ・フレッド・ドレッキ, 2007 『心を自然化する』 鈴木貴之訳, 勁草書房
- ・前田高弘, 1999 「スワンプマンにさよならする」『科学哲学』32-1号, pp. 67-82
2002 「スワンプマンに再会する」『科学哲学』34-1号, pp. 89-93
2009 「知覚経験の対象としての性質」『科学哲学』40-2号, pp. 41-56

- ・美濃正, 1999 「クオリアなんて怖くない」『科学哲学』32-2号, pp. 39-52

外国語文献

- ・Levine, Joseph M. (1983). "Materialism and qualia: The explanatory gap." *Pacific Philosophical Quarterly* 64 (October):354-61
- ・Jackson, Frank. (1982) "Epiphenomenal Qualia." *Philosophical Quarterly*, 32: 127-36
- ・S, Palmer. (1999). "Color, Consciousness, and the Isomorphism Constraint." *Behavior and Brain Sciences* 22:923-989

インターネットサイト

- ・Michael Tye, "Qualia" (Stanford Encyclopedia of Philosophy),
<http://plato.stanford.edu/entries/qualia/>,
初公開日 : Aug 20/1997 最終更新 : Dec 18/2017 閲覧 : 2016/11/3
- ・David Papineau, "Naturalism" (Stanford Encyclopedia of Philosophy),
<https://plato.stanford.edu/entries/naturalism/>,
初公開日 : Feb 22/2007 最終更新 : Sep 15/2015 閲覧日 : 2016/12/5

付録 [デネット, 2009, p. 119]

